

プロジェクトK

vol.42

文責：荒木 秀夫
(徳島大学大学院教授)

問合せ先／スポーツ推進課 プロジェクトK・
スポーツ推進係…☎57-4850

「定位分化能力」に見る 「感覚」と「運動」

今回は、定位能力の基礎となる感覚情報処理が上手くいかないという「動き」が生じるという前回の話しの続きとなります。その「動き」は小さなものですが、いわゆる「定位反射」に含まれる眼球運動などとは異なり、意思に関する動きで、「定位分化能力」に見られるものです。「分化能力」は、運動・行動といった面を中心に解説してきましたが、以前に触れたように感覚系に関わる部分も含まれています。感覚系とは、音や映像を事細かに分析するという意

味ですが、結局のところ感覚入力に対する「定位能力」、反応に対する「分化能力」と大雑把には区分されても、それぞれに一見逆と思えるような運動系と感覚系が含まれていることとなります。こうした定位能力における「運動」と「分化能力」における「感覚」とのつながりが、まさに「定位分化能力」の土台となります。何となく、「感覚運動統合」を連想させますが、感覚運動統合は反射的なレベルから人間の意識に関係するレベルまで多彩な内容を含んでいます。定位分化能力とは、感覚運動統合の一つのあり方で、感覚と運動とのつながり

方における「予見する能力」ともいえるものです。ある状況において新しい刺激が加わると、その刺激がどのような意味があるのかといった分析としての「定位能力」が発揮され、それに伴って必要な反応があれば、適切に反応する「分化能力」が発揮されます。ここでは、あくまでも、情報処理と反応の制御といった関係にあるわけですが、これをもっと効率よく発揮するためには分析を省略して、速やかに反応するための回路が作られることとなります。別の言い方をすると、分析する前に反応して、その結果の誤差を分析する…ということなのです。

このような言い方をすると、「学習」のことかと思われるかもしれませんが、確かに学習という面もありますが、学習と異なるのは、まったく別の条件や課題においても、速やかに刺激に対して反応できるといったことが定位分化能力の特徴です。一般に学習とはあるパターンを繰り返し返して実践することによって、いつでも、すぐに実践できることを意味しますが、新しい反応、運動、行動などを経験すると、そこで得られた方法を、

まったく異なる分野でも応用することができることになります。それを支えるのが定位分化能力です。冒頭で述べた定位能力における「わずかな動き」は定位能力の一部で、分化能力における「わずかな感覚処理」が分化能力の一部ですが、この「動き」と「感覚処理」の関係から新たに定位分化能力がつけられます。このことは、スポーツ選手の中でよく見られる反応の硬さの問題と深く関係しています。「分かっていただけ、動けなかった…」、「動けたけど、予想と違っていた…」といったことです。もう少し詳しい内容に触れることにしましょう。

乳児向けコーディネーショントレーニングの冊子を作成しました

この冊子には、徳島大学大学院荒木秀夫教授が執筆し、広報嘉麻（平成27年4月号から平成28年3月号まで）に掲載した赤ちゃんの能力に関するコラムに加え、荒木教授から紹介していただいた乳児向けのコーディネーショントレーニングプログラムを掲載しています。

コーディネーショントレーニングについて、これから赤ちゃんを育てていく保護者の方に役立てていただくため、平成28年4月から母子健康手帳と一緒に配布する予定です。なお、内容について関心のある方は、お気軽にお問合せください。

